

二 自

〇 選

一 句

四 集

大谷  
弘至

金戒光明寺会津藩士墓地

露の墓会津の酒であたたまれ

ものの実のことに賢げ菩提子は

惜しみなく花かすれゆく屏風かな

そのむかし神に仕へて暦売

あをぞらにばさと広げて暦売

流れきてまたいづこへと暦売

きらきらと払へば煤もまた仏

枝ぶりの名の松ならん飾売

大年の波にのまれて鶉が一つ

いがみあふ二つの国もけふの春

松脂のはつらつとして松飾る

おもふままま筆は走りて花の春

たまはりし命温めん年の酒

将門を討つて真白き破魔矢かな

幼さののこる猿曳き猿もまた

春うごく猿曳の猿跳ねるたび

猿一匹曳いて次なる町へまた

亀一つ浮いて島なす梅の花

一の花とんで二の花梅の花

獅子舞やばちんと口を真一文字

ほろ酔うて獅子舞もどる田んぼ道



なまこてふ覚めざる山の「とときもの

一寸焚く火にも火の神うつりくる

狼や木魂となりてさまよへる

鯛焼に生まれて海をまだ知らず

荒れ狂ふ波に氷りし鮫のいろ

糶売りのこはごは計る鮫の丈

大きくてまこと下手なる初音かな

覚めにけん泣いて眠りし山もまた

春の雷はらりと空を濡らしけり

象ほどな大きくなうれひ水温む

象の耳この世の春をひとゆらぎ

春眠の百獣の王以下その他

借りる目のどれも疲れ目目借時

熊本城

花満ちていよいよ不落の城ならん

漱石の見合ひの春となりにけり

春眠のわれを離るるわが寢息

大鮒やびくを跳ね出てかぎろへる

野遊びや牛一頭を曳いてくる

ぐんぐんと伸びゆく枝に巢籠れる

馬の仔にすでに嘶くのみどあり

世に疎くただ春鬪を頼みとす

山葵採り寝起きの熊に気をつけよ

どの道をゆくも雪道山葵採り

よき水に育ちすぎたる山葵かな



神宿る岩をこそぎて海苔を搔く

その男天下のうつけ柏餅

ひきがへる皺みしわみつ存らふか

もたげたる頭寒げや山椒魚

眠る上を鱧にゆかるうつぼかな

涼しさや風は立たねど鱧のひれ

音たてて竹となりゆく竹の子よ

けさの揺れ竹の子が出てきたりけん

袋角替への袋も欲しからん

雷の大きなことを国自慢

落ちてくる雷を馳走や冷し酒

雷にとり囲まれてわが眠り

こころにて老子も牛を冷しけん

母の日の母なる海に帆は白く

革命の朝や真白き日傘ゆく

喜雨到るごとくに人のつどひくる

鋸山

雲をゆくわれも修験やほととぎす

伐り出せし石はいづこへ山は夏

老鶯の声が削りし山ならん

一山の瑠璃がこぼれて蜥蜴生る

この浦の鯨で育ちて出征す

籐椅子やよべは大きな月の中

君らみな見返り美人冷し酒

ごつごつと雲が湧き出て鱧の旬



草笛や四川の暑さ如何ばかり

億年を眠りては覚めまだ海月

十薬のはびこつてゐる寢覚かな

蟹の穴どれも釣られしあとの穴

分け前はべらとこのしろ夏の空

蚊柱をこぼれておのれ取りもどす

丸亀・妙法寺は蕪村ゆかりの寺。

蘇鉄咲く蕪村が寺を去りし日も

名物の団扇に負けぬ男ぶり

長尻の春を立たせて棕櫚の花 蕪村

長尻の蕪村を置いてゆく夏ぞ

わだなかに眠るだれかれ蛍来い

こぼれても金魚の泪水の中

この暑さ穀象も産み疲るらん

水あればすなはち澄んで水の秋

糸とんぼ二つになつてもどりくる

蟬のこゑいよいよ恋の秋に入る

一匹の子猫の魂も祭りけり

大文字や悪筆ゆるせわが護摩木

濡れながら担ぐ護摩木や大文字

大文字ざんざんぶりのあとの火よ

雨粒に宿れる魂も送りけり

朝露か泪か濡れて消し炭は

虫一つ消えかけの火を取りにくる

あの山のむかうも誰か相撲とる

掘りきれぬ牛蒡が  
いまだそこそこに



咲く萩をばりばり食うて鳴く虫ぞ

われと来て南蛮ぎせる吹いてみよ

天に在る誰かれのこと芋の秋

あをあをと松をのこして蛇穴に

さきがけて色づく蟹や山は秋

新豆腐ゆらゆらゆれて角八つ

芋虫に巨人のごとくわれの影

お台場のちよつと先にて鱸舟

幼さののこれる角も伐られけり

もろこしをがりがり食へばインカの子

もろこしの一粒づつに宿るもの

もろこしやインカの民は滅ぶとも

はばかりず蚯蚓鳴くなり土の中

土食うて声が枯れしか蚯蚓鳴く

声上げて蚯蚓を呼べる蚯蚓かな

製作…古志社

公開…二〇一五年七月一日

初出…「古志」二〇一四年一月号、十二月号

著者略歴

大谷弘至（おおたにひろし）

一九八〇年、福岡県生まれ。「古志」主宰。句集『大  
旦』（角川学芸出版）。